

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷二十二第

行發日一月五年五十正大

論叢

交通税及消費税における重複課税……法學博士 神戸 正雄
 支那に於ける鴉片問題の起因を論ず……文學博士 矢野 仁一
 チアアルス・ホールの文明論……教授 堀 經夫
 租税收入の季節的變動……法學士 汐見 三郎

說苑

勞農露國に於ける金融制度の復活……經濟學士 谷口 吉彦
 妙心寺派教團の共濟制度……經濟學士 中川與之助

雜錄

藩札の濫發と農民の疲弊……經濟學士 黒 正 巖
 獨逸に於ける犯罪統計……經濟學士 岡崎 文規
 エツヂウアース教授逝く……經濟學士 蜷川 虎三

法令

地租條令中改正、所得税法中改正、

オックスフォード大學の經濟學の名譽教授にして、All Souls College の Fellow であつたエッジワース教授 (Professor Francis Ysidro Edgeworth) は去る二月十三日の朝、病むこと幾何もならずして逝去されたことである。行年八十一歳と云へば、天壽を全うされたとも考へられるが、昨年七月には、ケムブリッジの Marshall 教授逝き、今や又、オックスフォードの此の碩學を失ふと云ふことは、學界のため、寔に痛惜に堪へぬ次第である。茲に聊か故教授を偲び、哀悼の意を表したいと思ふ。

二

エッジワース教授の經濟學上の系統は、英國に於て、Wicksteed, Smart 等と共に、奧地利學派の流を汲んでゐるが、其の經濟學に於ける著しい貢獻は、經濟學の研究に、數學的觀念を導入し、數學的方法を採用して、概念の正確、表現の簡明適確を圖ると共に、之に依つて經濟の純理論を展開した所に在る。之れ、教授が數理經濟學者 (Mathematical economist) と呼ばるゝ

エッジワース教授逝く

蜷川虎三

- 1) The Times, Feb. 16, 1926 (The Times, weekly ed. Feb. 16, 18.)
- 2) L. H. Haney, History of Economic Thought, revised ed. p. 594.
- 3) J. K. Ingram, A History of Political Economy 1919, p. 269.

所以であるが、所謂、数理經濟學の發達史上、其の業績は、英國を代表するもの、伊の Pareto、Pantaleoni、獨の Launhardt、Auspitz、Lieben 等に比すべきものであらう。勿論、英國には、エッヂワース教授と並んで Marshall 教授の業績が、数理經濟學の發達に貢献する所、決して少くはないのであるが、エッヂワース教授は彼に比すれば、純粹の意味で、より多く数理派であり、其の經濟學に對する態度には、自然科学的色彩の濃厚なるを感ぜざるを得ない。従つて、教授が經濟理論の解析に明晰なる頭腦の鋭さを示し、方法の研究に於て、數學並に理論物理學等に對する造詣の深きを感ぜしむる反面には、社會科學である經濟學の研究者としての調子が低く、餘りにアカデミカルで、實際の經濟問題等に對して、其の蘊蓄を傾むけると云ふ様なことは教授の得意とする所ではなかつたのである。斯かる事實は決して教授の偉大なる經濟學者としての名譽を毀つけるものではなく、寧ろ、純理論家としての己の天地を守り、謬想の

霧に閉ざされ勝な經濟學の未拓境の開發に生涯の努力を捧げられた教授の、勇敢にして一本調子の學者的の風格に、より多くの親しみを感ずるのである。かの歐洲大戰中、時局問題たる戰時經濟等の問題に關し、自ら小冊子を刊行し所見を述べしにも拘らず、餘りに高踏的であり、抽象的の論議に過ぎて、學府初め世の視聽を惹く所がなかつた云ふが如きは、全く教授の學問研究の態度を思はしむる一例とすることが出来る。

即ちエッヂワース教授が自ら己が任とし、又得意とせられたのは、純理論的方面殊に數學的方法に依る經濟理論の研究並に其の方法の問題であつた。而も教授は、理論を發展して到達すべき結果そのものより寧ろ其處に至る方法の問題に多大の興味を持たれたのである。従つて、教授の業績が主として數學と經濟學との交渉の範圍に限られ、此方面に於て學界に貢献されしことの大なりしは、寔に謂れなきことではない。其の經濟學上の業績の主なるものは、昨

年の春、「經濟學論文集」⁵⁾として刊行されたから、教授の學風や、其の研究態度、或は業績の範圍等を窺ふには甚だ便利である。勿論、此の論文集は、所謂全集ではなく、専ら Economic Journal 誌上に載せられたものを採り、而も、

教授が自ら一定の理由に基いて不適當と考へられたものは之を收めず、且又、教授の業績の他の半面をなす所の統計學上の研究には一切觸れてはおらないから、其の生涯の業績を網羅せるものではない。併し、教授の經濟學上の論文は、主として、Economic Journal 誌上に發表されたものであり、且つオックスフォード大學の經濟學の教授として就任(一八九一年)以來一九二一年に至る三十年間に於ける主なる論文を集めたものであるから、之を以て、教授の學風なり、學問上の傾向、功績なりを充分に推知し得る譯である。殊に教授自ら、其等の論文を(一)價值及分配、(二)獨占、(三)貨幣(以上第一卷)、(四)國際貿易、(五)租稅、(六)數理經濟學(以上第二卷)及び(七)評論(第三卷)等に分類されておるか

ら、教授の斷られておる通り極めて大體の分類にせよ、之に依つて其の業績の範圍が何邊に在るかを窺ふことが出来る。⁶⁾

此等の論文に依つても明かなるが如く、エッチワース教授の研究の本流は數理經濟學的の純理論であり、其の重要にして價值ある研究は、假令、論ずる所が貿易に關し、租稅に屬するものであらうとも、數理的研究が基調をなしてゐる。従つて、斯かる意味に於ては、其の研究の對象とする所が、他の數理經濟學者のそれと著しく異なるものではないが、或は獨占を論じ、需要供給の數學的理論を説明し、或は租稅の純理、分配の理論、鐵道賃率の問題を取扱ひ、更に、一般的に數學が經濟學の研究に如何なる意義を有するかの問題並に數學の特殊部門、例へば確率論、微分學等の適用を論ずる等、數理經濟學の理論及其の研究方法に就いて、吾人を教ふる所が極めて多い。⁸⁾殊に、數理經濟學に於ける中樞問題である所の、經濟的平衡に關する教授の業績は此の方面の研究に於

5) Papers relating to Political Economy, 3 vols. 1925 (Macmillan)

6) Papers, Preface.

7) Papers を紹介する意味に於て、Pigou 教授が Edgeworth 教授の業績を簡潔に而も極めて suggestive に論じた一文がある。A. C. Pigou, "Professor Edgeworth's Collected papers" The Economic Journal, June, 1925, pp. 177-185.

8) Mathematical Economics に關する論文の題目は、Papers, Vol. II, p 477 を見よ。

て、忘るゝを得ぬ重要なものであるが、其の研究は、教授が後日数理經濟學者として立つ出發點をなした *Mathematical Psychics* に現れてゐる。⁹⁾ 實に、一八八一年、教授が卅年三十七歳にして世に問ふたものであるが、其の學窓に在るの日、語學の勉學に力を注ぐと共に、他方、數學、哲學、經濟學、統計學等に精力を傾注し、後、*Kings College* に論理學、經濟學等を講じ、讀書思索の熟して初めて公刊したものであるから、数理經濟學上、獨創に富む價値ある研究として、重要な位置を占むることは毫に當然のことである。

斯くの如く、エツヂウアース教授の經濟學に於ては、數學は重要な意義を有つてゐるが、教授自身は、必ずしも數學を以て經濟學の研究に對し、必須の科目とは認めず、勿論唯一の研究方法などとは決して考へておられないのである。此等の態度は、オックスフォード大學に於ける教授の就任講演「經濟學の目的と方法」¹⁰⁾ に依つて窺ふことが出来る。たゞ教授は、經濟學

が數量關係を扱ふ以上、或は函數觀念を導入し或は微積分の觀念並に其の方法を用ひ、表現の適確簡明なるを得るために、數學に慣用する文字を藉り、或はグラフを用ふるの便利なるを説くに止まり、數學式の濫用のペダンティックなるを警め、更に又、數學的方法の經濟學の研究に於ける價値を買被つてはならぬことを誨へておられるので、此等の點に於ては *Marshall* 教授の執られた態度と、さして異なる所はない。¹¹⁾ 經濟學に於ける數學的研究の價値は、時に異論のないではないが、既に右に述べた意味よりしても、吾人は、その甚だ必要なることを主張するに躊躇せぬ者である。¹²⁾ 況んや、エツヂウアース教授も述べたるが如く、經濟學が學問上の進歩に於て他の科學に比しハンディキャップの附いてゐる以上、之が科學としての發達のためには、數學的方法に依り、概念の正確表現の適確を圖り、理論をして明確ならしむる必要は、經濟學の著しく進歩した三十余年後の今日に於ても、否、その今日なるが故に、更に重要なこ

- 9) cf. WL. Zawadzki, *Les Mathématiques Appliquées a L'économie Politique*, p. 140
10) 又は "The Determinateness of Economic Equilibrium" (Papers, pp. 313-319) 及び "On some Theorems due to Pareto, Zawadzki, W. E. Johnson, and others" (Papers, pp. 450-491) 等参照
11) *The Objects and Methods of Political Economy* (Papers, Vol. I. pp. 3-12)
12) 此等の點に就いては、前記の論文並に *Application of Mathematics to Political Economy* (Papers, Vol. II. pp. 273-312) 及び *Mathematical Method in Political Economy* (Palgrave Dictionary, Vol. II, 1917, pp. 711-

とであり、此の意味に於て、数理派の經濟學の研究並に其發展は、現在の經濟學の研究に於て重要な意義を有すると共に、經濟學の研究に於ける數學の研究の必要は益々重要となりつゝ、あることを否むことは出来ないのである。Cournot, Dupuit, Gossen, Jevons, Walras 等の数理經濟學の先驅者の後を承けて、他の諸國の學者と共に、更に一段の發達に貢獻したエツヂウアース教授の業績を顧ることは、單なる回顧的の意味以上に、吾等の經濟學の將來を示唆する所のもの、多く存することを忘れてはならない。

三

エツヂウアース教授の業績中、如上の經濟學的研究以外、大なる部分を占むるものは、統計學殊に数理統計學 (Mathematical statistics) に關する諸論稿である。数理統計學者としてのエツヂウアース教授は、Lexis, Bortkewicz, Westergaard, Galton, Pearson, Yule, Bowley, Fechner, Czuber, Blaschke 等と並ぶ重要な位置を占めてゐることは、敢て茲に多く述べる必要はない。

であらう。教授は、數理的演繹法を研究法として採れる反面には、統計に依る理論の實證の必要を認め、統計方法の必要なるを説いておられるが、¹⁶⁾ 其の研究は、經濟學に於けるものと同様に、理論的方面に限られ、主として統計的方法或は統計的推論の基礎たる數學的研究の範圍に止まり、經濟問題の統計的、實證的研究には及んでおらないのである。其の統計學に對する態度は、かの有名な論文、"On Method of Statistics"¹⁷⁾ に依り窺ひ得るが、極めて粗雑な云ひ方をすれば、教授の業績の主なるものは、確率論、誤差理論並に度數分布の問題¹⁸⁾ 及び相關の理論的研究¹⁹⁾ 等の範圍に屬する。確率論に就いては、Crofton, Pearson 等と共に英國の代表的學者とされてゐるが、²⁰⁾ 教授の確率論は Lexis 等の所謂獨逸學派の影響を受け、英國と大陸との思想の唯一の連鎖をなしたものと云はれてゐる。²¹⁾ 誤理差論と共に此等の點に就いては、多くの確率論並に統計學書の論ずる所であるから、暫く此等に譲つて此處には詳説を避ける。²²⁾ 相關の

718) 等を參照

13) cf. J. N. Keynes, The Scope and Method of Political Economy 1917, ch. VIII. I. Cossa, An Introduction to the Study of Political Economy (Eng. trans.) 1803, pp. 88-91

14) Papers, Vol. 1. p. 5

15) F. Žizsek, Die Statistischen Mittelwerte, S. 201,

16) The Objects and Methods of Political Economy (Papers, Vol. I. p. 10)

17) Jubilee Volume of the Royal Statistical Society, 1885.

18) 此等の研究に就いては、J. M. Keynes, A Treatise on Probability pp. 441-442 (Bibliogr. phy) を見よ。

誤差理論並に度數分布の問題¹⁹⁾及び相關の理論的研究²⁰⁾等の範圍に屬する。確率論に就いては、Crofton, Pearson 等と共に英國の代表的の學者とされてゐるが、教授の確率論は Lewis 等の所謂獨逸學派の影響を受け、英國と大陸との思想の唯一の連鎖をなしたものと云はれてゐる²¹⁾。誤理差論と共に此等の點に就いては、多くの確率論並に統計學書の論ずる所であるから、暫く此等に譲つて此處には詳説を避ける²²⁾。相關の理論は、統計方法の樞軸であるが、之に就いては Galton, Pearson, Yule, Bowley 等の英國の諸學者と共に其の名の謳はるゝことは、筆者の嘗つて紹介した所である²³⁾。

經濟問題と關聯して、統計方法を論じた最も重要なエッチウアース教授の研究は、貨幣價值變動の測定を目的とした物價指數の問題である。物價指數に關する教授の見解は、前記の論文集の“Money”の項²⁴⁾、或は Palgrave の辭書中教授の執筆になる“Index numbers”に依り知ることが出来るが、物價指數の研究に對する教

授の業績は没するを得ざるものである²⁵⁾。なほ、教授に就いて吾等の忘るゝことの出來ぬものは、教授の執筆になる Palgrave の辭書中の五十餘項に亘る説明である。殊に、「確率及確率論」「誤差理論」「函數」「曲線」の如きの數學上の説明、「平均」、「センサス」、「死亡率」等の統計に關する事項、或は「效用」、「獨占」、「競争」、「交易」、「需要曲線」、「供給曲線」等の數理經濟上の問題及び、Cournot, Dupuit の如き數理經濟學者に關する紹介、評傳の如き、何れも明快なる説明を與へられておる。此等は、その論文集第三卷の經濟學書の評論と共に、經濟學を學び、研究する者に特別な興味と利益とを與ふるものであることを特に記して置きたいと思ふ。

四

エッチウアース教授の學問的研究業績以外、大なる功績は、一八九〇年に Royal Economic Society の設立せられて以來、其の Secretary として、又其の機關雜誌、Economic Journal の

22) 此等の點に就いては、例へば、Czuber, Wahrscheinlichkeitsrechnung, Zizek, Statistischen Mittelwerte, Yule, Introduction, Bowley, Elements, 前掲の Keynes の Treatise 等を見よ。

23) 拙稿 照應の理論と社會及經濟統計 經濟論叢第十八卷第三號

24) Papers, Vol 1, pp. 195-405

25) Palgrave Dictionary of Political Economy, Vol II. p. 384.

26) I. Fisher, Making of Index Numbers p. 459. (なほ Walsh, The Problem of Estimation を見よ)

Editor の一人として先には Higgins と、後には Keynes と共に、其の死に至る迄、よく盡力されたこと云ふことである。學會は、其の勞に酬ゆるために、一九二三年、教授の論文集を刊行せんことを議し、世に送り出したのが前述した論文集三卷である。其他、種々の學會に關與し、英國の學術の進歩發達に貢獻した所も決して少くはない。²⁷⁾

一八四五年一月八日、Ireland の Egeworthstown の舊家に生れ、本年二月十三日、Oxford に長逝するに至る八十一年のエツヂウアース教授の生涯は、極めて平和な學者的の生活に終始されたのである。殊に一八九一年 Thorold Ross の後を承けてオックスフォード大學の教授となり、一九二二年、其の退職に至る三十一年間及び其の晩年を通じて三十五年有餘の長日月を All Souls College に在つて學問の研究に精進し、倦む所を知らなかつたのである。終生娶ることなく、僅に、登山、²⁸⁾漕艇、ゴルフの如き運動を無二の樂みとして、思索と研究の生活

に、常に若人の如き元氣を以て努められたこと云ふことは、到底、常人の及び得る所ではない。教授の獨身は、嘗つて Maria Edgeworth の如き著名なる小説家を出したる Edgeworthstown の舊家エツヂウアース家を絶へしむることゝなつたが、彼の業績は經濟學上不朽のものであり、殊に理論的の方面に独自の學風を有てる開拓者として、其の名は永遠に輝くであらう。

- 27) 前掲 The Times 參照。
 28) Edgeworth 教授の文章を引用して極めて興味ある紹介をした前記の Pigou の論文を見よ。
 29) Maria Edgeworth (1767-1849) "Castle Rackrent" の如き Ireland の地主と小作人の關係を描いた小説を書き、經濟問題を取扱つたことに依り知られてゐる。(詳細は Palgrave Dictionary Vol. I. 680-681 を見よ)